# 太宰治全集

## 10

筑摩書房

太宰治全集第十巻

昭和四十二年十二月二日初版第一刷発行
昭和四十五年六月二十日初版第六刷発行

著者　太宰治

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

印刷・三晃印刷
製本・鈴木製本

(分類) 0393 (製品) 70010 (出版社) 4604

# 第十卷

# 目次

昭和十年

もの思ふ葦（その一）　四
はしがき　四
虚榮の市　五
敗北の歌　七
或る實驗報告　九
老年　九
難解　一一
塵中の人　一二
おのれの作品のよしあしをひとにたづねることに就いて　一三
書簡集　一三
兵法　一五
In a word　一五
病軀の文章とそのハンデキヤツプに就いて　一六
「衰運」におくる言葉　一七
ダス・ゲマイネに就いて　一七
金錢について　一九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

放心について　一九
世渡りの祕訣　二〇
緑　雨　二〇
ふたたび書簡のこと　二〇
わが儘といふ事　二一
百花撩亂主義　二三
ソロモン王と賤民　二三
文　章　二三
感謝の文章　二三
審　判　二四
無間地獄　二四
餘　談　二五
川端康成へ　二六

## 昭和十一年

もの思ふ葦（その二）　三〇
葦の自戒　三〇

感想について　三〇
すらだにも　三一
慈　眼　三一
重大のこと　三二
敵　三二
健　康　三三
K　君　三三
ポオズ　三四
繪はがき　三四
いつはりなき申告　三四
亂脈を燒き切る　三五
最後のスタンドプレイ　三五
冷酷といふことについて　三六
わがかなしみ　三七
文章について　三七
ふと思ふ　三七
Y　子　三七
言葉の奇妙　三八

まんざい　三八
わが神話　三八
最も日常茶飯的なるもの　三九
蟹について　三九
わがダンディスム　三九
「晩年」に就いて　四〇
氣がかりといふことに就いて　四一
宿題　四一
人物に就いて　四四
碧眼托鉢　四七
ボオドレエルに就いて　四七
ブルジョア藝術に於ける運命　四八
定理　四八
わが終生の祈願　四八
わが友　四八
憂きわれをさびしがらせよ閑古鳥　四九
フイリツプの骨格に就いて　四九

或るひとりの男の精進に就いて　五〇
生きて行く力　五一
わが唯一のをののき　五二
マンネリズム　五三
作家は小説を書かなければいけない　五四
挨拶　五四
立派といふことに就いて　五五
Confiteor　五五
頽廢の兒、自然の兒　五七
古典龍頭蛇尾　五八
悶悶日記　六二
走ラヌ名馬　六六

## 昭和十二年

音に就いて　七〇
檀君の近業に就いて　七三
思案の敗北　七四

創作餘談　七九

昭和十三年

「晩年」に就いて　八四

一日の勞苦　八六

多頭蛇哲學　九〇

答案落第　九三

緒方氏を殺した者　九七

一歩前進二歩退却　九九

富士に就いて　一〇一

校長三代　一〇三

九月十月十一月　一〇六

昭和十四年

春畫　一一四

當選の日　一一六

正直ノオト　一二二
「人間キリスト記」その他　一二五
困惑の辯　一二七
市井喧爭　一三二
酒ぎらひ　一三五

昭和十五年
このごろ　一四四
心の王者　一五〇
鬱屈禍　一五三
知らない人　一五六
諸君の位置　一六一
三月三十日　一六四
無趣味　一六七
義務　一六八
作家の像　一七一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

大恩は語らず　一七六
自信の無さ　一七九
六月十九日　一八一
國技館　一八三
貪婪禍　一八五
自作を語る　一八八
砂子屋　一九一
文盲自嘲　一九三
パウロの混亂　一九五
かすかな聲　一九八

昭和十六年

男女川と羽左衛門　二〇二
弱者の糧　二〇四
五所川原　二〇七
青森　二〇九

「晩年」と「女生徒」　二一一
容貌　二一三
世界的　二一五
私信　二一七

昭和十七年
或る忠告　二二〇
食通　二二二
一問一答　二二三
無題　二二五
炎天汗談　二二六
小照　二二八
天狗　二三〇

昭和十八年
赤心（辻小説）　二三八

わが愛好する言葉　二三九
金錢の話　二四〇

昭和十九年
横綱　二四六
革財布　二四七
藝術ぎらひ　二五一
鄕愁　二五五
純眞　二五七
一つの約束　二五八

昭和二十一年
返事　二六二
政治家と家庭　二六六
津輕地方とチエホフ　二六七
海　二七一

同じ星　二七三

昭和二十二年
織田君の死　二七六
新しい形の個人主義　二七八
小志　二七九
わが半生を語る　二八〇

昭和二十三年
かくめい　二八八
小説の面白さ　二八九
徒黨について　二九一
黒石の人たち　二九四
如是我聞　二九六

## 序文・後記・解説


田中英光著『オリムポスの果實』序　三二八
宮崎讓詩集『竹槍隊』序　三三〇
櫻岡孝治著『馬來の日記』序　三三二
村上芳雄著『洋燈』序　三三四
豐島與志雄著『高尾ざんげ』解説　三三六
『井伏鱒二選集』後記　三三九
宇留野元一作「樹海」序　三五五
「地球圖」自序　三五六
『愛と美について』自序　三五七
『思ひ出』自序　三五八
『東京八景』あとがき　三六一
『風の便り』あとがき　三六二
『老ハイデルベルヒ』自序　三六三

『正義と微笑』あとがき　三六五
『女性』あとがき　三六六
『富嶽百景』自序　三六七
『惜別』あとがき　三六八
『パンドラの匣』作者の言葉　三七〇
「パンドラの匣」あとがき　三七一
『玩具』あとがき　三七二
『猿面冠者』あとがき　三七四
『姥捨』あとがき　三七五
『女神』あとがき　三七六
「グッド・バイ」作者の言葉　三七七
後記　三七九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.